

## 母子分離不安を解消し、子どもの自立感を促すための人的な環境の構成をめぐる考察

～母親の日常的な保育参観・参加・相互理解と子どもへの影響に注目して～  
（4歳児・4月～7月の生活から）

4歳児 たんぽぽ組 担任 野津道代

### はじめに

新教育要領の実施に伴って、1999年度より、わたしたちは最近の子どもをとりまく社会・家庭環境の多様化と変化に伴う、子どもの発達の様相の変化に注目し、現行の教育課程を見直し再編成していく作業に取り組んできた。

その中で、私は子どもの発達の様相の変化とみなされることがらの一つである、入園当初に母子分離（注1）への不安を強く表わし、母親から離れても安定して遊べるようになるまでの期間が長期に及ぶ子どもが増えてきていることに注目した。その傾向は、3歳児だけでなく4歳児においても増加している。こうした現象は、単に子どもの性格や社会性の発達の問題ではなく、入園前の家庭環境・社会的経験や母子関係に起因しているように思われる。例えば、核家族が多く、地域社会とのつながりや近隣の保護者同士での子育ての連携や協力関係が希薄になっていることから母親が孤立化し、同時に教育情報の氾濫の中で子育てに対する迷いや不安、自信の無さ、子どもへの過剰な心配などによって、母子分離への不安を母と子が共に感じていることが入園当初の様子から伺える。

入園後1～2週間は、多かれ少なかれどの子どももさまざまな姿で緊張感や不安感を表わす。例えば黙って立ち尽くす、あちこちを動き回る、他の子を威嚇したり、乱暴な行動をする、保育者に寄り添い、側を離れようとしめないなどである。私はかつて「こうした形で表わされる緊張感や不安感を乗り越えていくことは、子ども自身の課題であって、それは保育者の援助によって時間とともに解消していけることであること。登園時に母親がいつまでも側にいるのは、子ども自らによる自立への第一歩の踏み出しを阻むことになるだろう」という見解に立って、母親から泣く子どもをもぎとる形で引き受けてきた。しかし、1995年度の3歳児・F子の事例を通して（研究紀要第32号各論1）、子どもの拒絶の中にことばでは表わせないその子の思いや意志を感じ、あらためて母子分離までの過程を「F子が納得して母親と離れ、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを共有するまでのステップと内的に経験している内容」として捉え直すことになった。

この実践記録をもとにした論文「登園をめぐるトラブルに関する臨床的研究」島根大学教育実践研究第7号1997年に於て肥後功一氏は次のように述べている。「幼稚園は、多くの子どもにとって初めての集団への参加の場となることから、社会性を身に付ける場、集団生活

への適応の場として捉えられることがある。こうした観点が強調されるあまり、就園に当たった子どもの不安定感や抵抗も、我慢させるべきもの、耐えさせるべきこと、そのうち適応していくべきものといった見方をとられることが少なくない。けれども、十分な心理的安定のはかれる保育態勢のもとでの「我慢・耐性・適応」と、保育態勢の不備から生じることとは、「我慢・耐性・適応」の心理的意味も自ずから異なるであろう」（5頁）こうした実践研究を経て、私は母子分離の問題は母親と保育者が子どもの思いを共有していくことによって解決し、このような方法を通して子どもの自立感—自己形成と社会化の第一歩である母子分離という問題を子どもにとってより積極的な意味を持つものとして経験させることが出来ると考えた。

### 入園時期の親子の受け入れ方を見直す

以上の見地から、入園後母子分離への不安を強く表わす子どもの場合、母子共に同時に心的な援助をしていくとともに、母親と連携して保育環境をつくっていく必要があると考え、本園では協議の上、次の事項を了解しあった。

- ①入園当初に強く不安を表わし、母親から離れられない子どもの場合は無理に母親から子どもを引き離さないで、母と子が一緒に幼稚園で過ごし、幼稚園という環境や保育者・友だちに親しみが持てるようにする。
- ②子どもが安定して保育者や友だちに信頼感が持て、自ら納得して母親と離れて遊べるようになる時期には大幅な個人差があることを踏まえて、一人ひとりの状態を見極め、それぞれの子どもの状態にふさわしい環境の構成と援助をしていくこと。
- ③母親の参観・保育参加の時期を限定しない。
- ④新入児学級（3歳児20名・4歳児は進級児10名、新入児25名の混合編成）における一学期の参観日の設定の方法、内容等を見直し、従来の学年で一斉に実施する「参観日」を改め、5月中旬の約一週間の期間、一日に4～6名のグループによる「一日保育参観日」として位置づける。そのねらいは、最も自然な状況の中での園での子どもの様子を知ってもらい、さまざまな子どもたちの遊びから、子どもの興味関心や個性の違いを感じたり、自分の子ども以外の子どものにも接したりしながら親しみを持ってもらうことである。そのために、保護者には参観と同時に自発的な保育参加（着替え、弁当時のサポート、不安定な子どもに絵本を読んでもらったり、一緒に遊ぶなど）を負担にならない程度にしてもらうようにした。その際、各学級担任は保育後、参観の保護者グループと一緒にその日の子どもの様子や個々の遊びの内容や様子、友だちとの関わり方などについて自由な感想や意見を聞き、その期の生活のねらいや、子どもが経験していること、子どもへの関わり方で大切にしていること、安全上の配慮などについて話し、保護者との共通理解を計っていくことを大切にした。なお、このことは母子分離が難しい子どもの母親に対しても個別に続けていった。

以上の入園当初の保育環境に対する考え方と方法を基盤として、本各論では次の仮説と研究の視点を設定し、4歳児6期（4月中旬）～8期（6月初旬～7月19日）の記録をもとに分析考察していく。

### 研究の仮説

家族（特に母親）から子ども集団の中へと自己の存在と活動の場を拡げていく時期の子どもの自立感（自己意識）の形成と社会性の発達にとって、母子分離の過程は重要な意味を持っているという見地から

入園後の母子分離不安を強く表わす子どもの場合、母親の日常的な保育参加と保育者、保護者の子ども理解のための連携カンファレンスによって、母と子双方の分離への不安を解消し、より確かな自立感を培っていくことが出来るのではないか。

### 分析考察の視点

- \* 出来るだけ無理を強くない状況の中で、母と子と保育者と子ども同士が相互に影響を及ぼし合いながら、それぞれが発達していく相互作用の過程をみつめ、子どもと母親が経験していることがらを分析する。
- \* 子どもの自立感と時期時期にふさわしい社会性の発達を促す保育者の環境の構成と個別的な援助の実際について考察する。

### 観察記録

入園当初、本学級（3年課程児10名、2年課程児22名計32名の混合学級）において母子分離が困難だった子どもーりこ、けいこ、すなお、なおと、まりこの中から、母と子の心の状態が記録として最もよく表わされたりこを中心として、りこに関わった子ども、母親と周りの子どもたちとの関わり、子ども同士の関わりに視点をおいてまとめた。なお、保育者は担任1名、観察記録者は担任であるが、りこの母親からの手紙も記録・考察の資料として引用する。引用については、母親の了解を得ている。

### 観察対象児（りこ）のプロフィール

りこ H8, 3, 14生（長女）  
父母・本人の3人家族

- ・入園前の集団経験 体操教室（親子体操）音楽教室（3カ月で中断）
- ・入園当初は保育者や友だちに対して、警戒心を強く表わし、自分から話たり、コミュニケーションを求めることなく、母親の側を離れない。
- ・一つひとつの動作にぎこちなさや自信の無さが感じられ、絶えず母親の援助

を求める

- ・入園当初～6月28日まで登園時母親と一緒に過ごすが、5月初旬より次第に一緒に過ごす時間が短縮されてくる。

## I 観察記録（りこを中心として）と保育者の読み取り・環境の構成

期	月日	
6期 ステップ1	4/14	<p>りこ 玄関で母親から離れない。が、9:10分頃、母親はりこを保育室まで連れてきた後、家に帰る。りこは、寄り集まるようにして粘土で遊んでいる子どもたちの側で立って、だまって見ている。</p> <p>けいこ 9:15分泣き出して、「ママがいい！ママのところへ帰りたい。」という。T「ママはお家でお洗濯してから迎えにくるよ」というと、けいこ「ちがう、ママはお友達の所にいるよ」という。Tは抱っこで慰めるが、頑として聞き入れないので、家に電話をして一番早く迎えにきてもらうことを約束してもらう。</p> <p>すなおは母親と一緒にいる。母親の存在を確かめながら、園庭に出てみたり保育室に帰ったりしている</p> <p>まりこは黙って立っている。Tが側へ寄って話しかけるが、黙ったままで表情を見せない。</p>
	4/15	<p>りこは玄関で母親と別れてくるが、9:30分に「お母さんに電話してー！」と繰り返しTに訴えながら激しく泣く。Tは、抱いてなぐさめようとしたが、おびえて受け付けられないので、母親に電話をして、「りこちゃんが激しく泣いておられて、私が抱こうとしても受け入れられない状態なのですぐに幼稚園にきてもらえませんか」と依頼する。母親は「え？いいんですか。」という返事の後すぐに幼稚園に来られる。なおとが「紙芝居読んで」といってきたので、読んであげると、近くで粘土をしていた数人の子どもたちが寄り集まってきて一緒に見る。その場の中ですなお、まりこ、りこも一緒に見ている。Tは、途中でりこの母親に「<u>こんどはお母さんに読んでみましょう</u>」と声を掛けて、りこのお母さんと交代する。りこはその後、あきおの作った積木の家に入れてもらい、粘土を始める。</p>
		<p><b>保育者の読み取りと環境の構成</b></p> <p>4/15 玄関で母親と別れたものの、不安に襲われたりこが大声で泣きながら「お母さんに電話をして！」と訴えるようにしていう姿を見て、T（保育</p>

者)は「この状態では自分に心を委ねないだろう」ということを直感した。りこは決してTに抱かれようとはせず、Tから離れるようにして、電話後、玄関の前に立ち、「ここでお母さんをまってる」と言った。なおとたちに紙芝居を読んであげる場面で、敢えてりこの母親と代わったのは、りこの母親に「保育室の中になりこと母親と他の子どもたちが共有できる居場所を作ってほしい」と願ったからである。そして、単なる参観者としてではなく、「これから一緒にりこちゃんを見ていきましょうね」という思いを伝えたかったのである。幸い、りこの母親はこの日の出来事を前向きに受けとめて下さり、翌日、次のような手紙を下された。

#### りこの母親からの手紙 4/16

これまで母親と離れることが殆どなかったものですから、朝私と離れようとしないうちを見て、心配していたことがやっぱり起こってしまったと思いました。他のお友だちはちゃんとお母さんと離れて教室に入っていられるのに、子ども同様私も不安でいっぱいになりました。でも、先生に、教室にいて下さっていいですよとおっしゃっていただいたり、また、自宅にまでわざわざお電話いただいたりしたこと、とても有り難かったです。

#### 8/6 (一学期が終わってから担任に届いた手紙)

(前文略) 実は2日目の朝、幼稚園で「お母さんもいて」といって泣いているりこを見て、親が子どもと一緒にいてもいいのか、(前もっていただいたプリントにはそう書いてあったのですが)あるいは泣いても親が帰った方がいいのか、先生にお聞きしようかとも思ったのですが、他のお母さん方もどんどん帰られるし、その時は残っているおかあさんはおられませんでしたが、先生もお忙しそうなので、うかがわないまま子どもに「またすぐ迎えにくるからね」と言い聞かせて、かわいそうにと思いながらも帰ってしまったところ、先生からすぐにお電話をいただきました。幼稚園に急いで再び行くと、先生は、「他にも子どもさんと一緒にいらっしゃるお母さんが何人もいらっしゃるし、帰らないで居てくださっていいですよ」とおっしゃっていただいて、救われた思いがいたしました。りこも私の姿を見て心底安定した表情になりました。

一方、3歳児から進級してきた子どもたちは、Tから距離を持って、保育室から離れた、3歳児いちご組の砂場や前庭を居場所にして、ダンゴむしや花を集めたり、三輪車に乗ったりして遊んでいる。一見遊んでいるように見えていても、担任との直接的なふれあいやコミュニケーションが持てない子

どもたちも多くいる。

- ・自分で遊びや安定出来る場所をみつけていける子
- ・だまって立って他の子の様子や遊びを見ている子
- ・保育者や母親を拠り所にして安定しようとする子
- ・園のいろいろな場所を探索している子

子どもたちのさまざまな思い、欲求、要求、動きを受けとめながらも、この時期には、午前中2時間30分の保育時間の中で、保育者一人で全ての子どもに十分に伝えていくことは難しい。しかし、可能な限り一人ひとりの子どもに応え、コミュニケーションをし、心の安定を計っていくためにも、母子分離が難しい子どもの母親の存在を、他の子どもと共有できる居場所として生かしていきたいと願った。

4/17

りことけいこは、母親にしがみつくようにして保育室に入ってくる。カバンや着替え袋を自分のロッカーに掛けて、Tが待つ円テーブルに来て、「おはようノート」にシールを貼るという登園時の一連の動きは出来ない。母親が代わってやっている。

この日は、学級の保護者が集まって、いろいろな係分担を決める日であったので、9:10分に担任が引き取ろうとして話しかけようとする、2人ともその意図を鋭く察知してしっかりと母親にしがみつき、「いやだー！お母さんがいい」と泣いて抵抗する。りこの母親は、保育者にすぎるような表情で「せんせい どうしたらいいのでしょうか？」といわれた。一方けいこの母親は、けいこに言い聞かせるようにして「お話が終わったらすぐにくるから」と説得している。

その後、けいこは保育者が抱き、りこは事務員の井原さんに応援をたのんで抱き取ってもらう。けいこは9:20分にTから離れて「おそとのおくつ持ってくる」といい、Tと一緒に散歩に出る。そしてグローブジャングルにいき年長組の女兒たちの中で一緒に乗る。

りこは、井原さんと一緒にいて泣きやんでいたそうだが、担任を見ると再び泣き出して「おかあさんをつれてきてー」と訴える。10時近くに保護者同士の話し合いが終わり、りことけいこの母親は降園時まで一緒にいる。

全員の子どもと保護者を送った後、Tはりことけいこの母親に残ってもらい、母親から別れた後の2人の様子を話した後で、「明日の朝も離れることは難しいと思いますので、当分お子さんが落ち着かれるまで保育室と一緒に上がってきてください。様子を見ながら判断して行きましょう」と伝える。その時、りこの母親の目に涙がにじんでいることに気付く。

### 保育者の読み取りと環境の構成－6期・ステップ1

りこの母親の目に涙がにじんでいることに気付いた時、りこだけでなく、りこと同じくらいに母親の不安感も大きいと感じた。「せんせい、どうしたらいいでしょうか?」と言われたことを思い返し、母親としてなすすべが分からない心細さと、保育者にすぎるような切実な思いが読み取れた。一方、けいこの母親は、比較的落ち着いた様子で、「お手をかけてすみません。よろしく願います。」と言われた。

保育者として子どもにアプローチしていく前に、まず母親の気持ちをほぐし、保育者と保護者が親しく子どもの様子を語り合える関係を築いていくことが先決であると心に銘じて、保育者の方から母親と子どもが離れることを促したり、急がせたりしないで、ゆったりとした雰囲気子ども歩みの一歩一歩をみつめ、共有していこうという保育方針を自分の中で確認する。

#### 4/17 りこの母親への返事

昨日、今日とお疲れさまでした。お母さんがいらっしゃってからのりこちゃんは、本当に水を得た魚のようで、しっかりと自分を取り戻して遊ばれる様子を見て、「やはりこの時期はお母さんと離れることを私たちが焦らない方がいいな」と思いました。りこちゃんは、ものごとや状況がよく見えているお子さんなので、よけいに心配なのでしょう。今日のような温かい雰囲気の中で、お友だちと関わって遊ぶことに慣れたら、自ずと「お母さんバイバイ」と言えるようになるでしょう。彼女が納得してお母さんから離れられる時を一緒に待ちましょう。

4/18

りこは母親と一緒にいる。

けいこは、一度玄関で母親と別れて入ってくるが、後を追っていく。Tは母親に「けいこちゃんと一緒に庭を散歩してからきてくださいね。」と言う。

保育室で母親から離れないでいるりこ、所在なさそうにしているすなお、母親から離れないでおんぶされたひろしたちに向けて、Tは「おうちつくるか」と呼びかける。すると、あきこ、すなお、なおと、ゆきおたちが心を動かして保育室にあるカラー積木を運んでくる。「おうち」の囲いが出来て、りこも入ってきたので、Tは絵本「999ひきのおたまじゃくし」を読んでやる。そして絵本のストーリーの中での遊び「かくれんぼ」を「一緒にしようか」というと、子どもたちはあちこちに散って隠れ、やがて、「ダンゴムシをさがしにいこうよ」となおとが言い出したので、りこも母親と一緒に連れ

だっていく。りこもダンゴムシ探しに熱中する。

4/20

登園時、円テーブルでの友だちとの会話が活発になる。そして、特定の友だちを見つけたり、誘いかけたり、気に入った遊びの場と一緒にいたりする姿が見られるようになった。なおとすなおは母親から離れても安定している。けいこも母親と昇降玄関で別れて入ってくる。カタツムリをみつめてきたのをうれしそうに見せてくれたので、Tと葉っぱを取りに行く。

9:30分現在、保育室では、だれかが要求したのだろうか、りこの母親に絵本を読んでもらっている。「999ひきのおたまじゃくし」の本を、りこの母親は落ち着いた様子で読み、あきこ、まりこ、すなおたちもりここと一緒に見入っている。

けいこは、たかしに「みて!かたつむりがうんちしてる」と呼びかけ、その後、男児たち3人が始めていた「ままごと」の場の中に、たかしと一緒に入って遊ぶ。

4/21

けいこは、保育室まで母親がついて入るが、その後しっかりと母親に抱かれて「一番にお迎えにくる」という約束を交わした後、納得して離れる。

りこは母親と一緒にいて、Tとも友だちともコミュニケーションを持つとはしない。Tが「おはよう」と言って近づいていくと、母親の後ろに隠れて大声で泣く。母「まあ、この子は・・・すみません先生」  
T「いいのよ、ね、りこちゃん」と気持ちをほぐすように笑いかけていく。



お母さんのいる場の中で安定する

だいすけが登園時、しばらくして母親が帰った後「お母さん、かえりたい!」と激しく泣く。Tが抱っこして「ダンゴムシさがしにいこうか」というと、すなお、まりこ、けいこ、なおとたちも一緒についてくる。

すなお「むしたんけんする?」

なおこ「ねえねえむしたんけんしようよー」とスコップを取りに行く。



なおこ「むしたんけんしゅっぱつ！」これでだいすけも元気になる。  
けいこもカタツムリの入ったむしかごを大事そうに持ってくる。  
やがて、ダンゴムシを探していた前庭のテーブルで、草花を材料にして、  
「すなおちゃんの誕生日のパーティ」が展開していく。

#### この頃のりこの様子－8／6の母親からの手紙から－

(前文略) まわりにも同じように不安で、でもがんばっているお友達がたくさんいるのに、お友達と一緒に遊ぶゆとりは全くないようで、ただ私がかどうか、少しでも見えなくなるとすぐに泣きだして、とにかく一緒になくてはなりません。結局、母子2人で、それも部屋の中よりは外の方がいいのか、外でばかり過ごす時間が長くなっていました。

それでも入園当初は何人か同じ様なお友だちもいて、そのお母さん方もいらっしゃったのでよかったのですが、だんだん降園の時間までいるのは私一人という状況になり、しかもいつまで続くかわからないあいかかわらずの様子に、私自身子どものためによくないとわかっていても気持ちが落ち込んでしまいました。

でも先生が「こちらは全くかまいませんから、お母さんは今ほりこちゃんと一緒にいてください」とやさしくおっしゃって下さって、本当にありがたかったです。

他のお友達と少しの時間でも一緒に遊ぶ(心のゆとりのない)ということも出来ず、先生が一生懸命にやさしい言葉を掛けて下さっても全く心を開かず、「おはよう、りこちゃん」と言って子供の側にこられようものなら、とたんに大声で泣き出して、なんとか先生から逃げようとするりこを見ると、こちらも自分の子なのにさっぱりわからなくなり、先のことを思うと真暗な気持ちになりました。また、りこはりこで私以上に大変だったと思います。

朝は「今日は幼稚園に絶対いかない！」で泣きながらはじまり、幼稚園にいても楽しいと思うまでのゆとりは全くないし、お友達とも遊べないし家に帰ってからも、沈んだ様子でした。夜は寝ていても突然、大声で「嫌だ！」5回くらい言うのを聞きますと、りこにとって大変なことだどつくづく思い、母子一緒に泣きたくなくなってしまうこともありました。

もしこの状態でりこ一人で過ごすすと、どんなに心細くて不安で緊張したかと思うと、「お母さんも一緒に・・・」と先生におっしゃっていただいたことはとてもありがたいことでした。

先生が、「お友達と遊べなくても、みんなの側にいるだけでもりこちゃんはお友達といえるこの雰囲気慣れますよ」とおっしゃってくださったのでみ

んなの側にいるとき、先生がだんご虫さがしをお友達とはじめられました。(4/18) その時、だんご虫が好きなりこは、夢中になってだんご虫さがしをはじめました。その様子を見て私は本当に嬉しかったです。

そして前庭のテーブルでバケツやスコップを出して、草を取ったり草を摘んでごちそうにするパーティーの時(4/21) あいかわらずお友達となじめないりこは、でもその場でお友達の様子を見ていました。そしてあるお友達がやつでの葉っぱをとって遊んでいました。それを見たりこは家にある本の「だるまちゃんが持っていた葉っぱだ」とすごく欲しそうにしました。でも自分で取ってくる勇氣はないようでじっと見ていました。するとともちゃんが「りこちゃん、はい」といって葉っぱを採ってりこにくれました。その時、私は本当に涙が出るくらいうれしかったです。りこは葉っぱをもらってはにかみながら、でもとても嬉しそうにしていました。それからともちゃんはりこのことも気にかけてくれるようになり、またともちゃんの方から近づいてきて遊んでくれるようになりました。そしてすぐ泣く子に「りこちゃん、だいじょうぶ?」「りこちゃん、つぎはなにをして遊ぶ?」と同じ学年の子とは思えないほど思いやりをもってりこに接してくれました。そのおかげでりこにも笑顔が見られるようになり、2人で土遊びなどして遊んでいました。ともちゃんのおかげでりこも私も本当に救われた気がしました。子どもにとってお友達というのは本当に大切なものだ改めて感動しました。そしてともちゃんを通じてなおこちゃん(ともこの双子の妹)というお友達も出来ました。

#### 保育者の読み取りと環境の構成－6期・ステップ1

この時期は、りこだけでなくけいこ、すなお、まりこ、なおと、だいすけたち数人の子どもたちが不安定な様子を表わしており、また活発な子供たちも保育者に認めてもらいたがる。子ども同士の気持ちが通じ合わないことから起るトラブルも頻繁で、保育者がりこに心を注いで接する時間はほんの数分であった。その上にりこ自身が保育者に全く心を開くことが出来ない状態で、りこに近づくとおびえるようにして保育者を避けるので、りこを環境に慣れさせていく方法としては直接的な関わり方を避けて、周りの子どもたちと自然に共有していけるような遊びの場を、子どもの動きに応じながらつくっていくことを心がけた。しかしながら、上記の母親の手紙からこの時期は母子共に不安と孤独感を強く感じていたことが読み取れる。さらに「自分の子どもなのにさっぱりわからない」「先のことを思うと真暗な気持ちになりました」と記されているように、母親自身が行きづまっている、絶望感に近い

気持ちが伺える。保育者は、りこに付き添って一緒に他の子どもの遊びを見ている母親に「大丈夫。りこちゃんは何にもしていないようでも、こうしてお母さんと一緒に遊びを見ていることが経験なんです。この時間は決して無駄にはならないし、この時間は、りこちゃんが自分で一歩を踏み出すために必要な時間なんだから、そう思って焦らないでいきましょうね。」と話した。それは、5年前のF子の事例を通して学んだ保育者の経験に基づいていた。しかしながらこの時期の母親にとっては、「なぜりこだけが？」という思いが強く、保育者の言葉は実感出来なかったのであろう。もっと母親のその時の気持ちを読み取り、不安や孤独感を共有した上でのカンファレンスのしかたを学んでいかなければならないと思う。

「この時間」の中で、周りの子どもがりこに目を向けていて、特にともこがりこに優しさや思いやりの気持ちを持って接していった。(4/21)りこも、それまでの頑なに友だちとの関わりを拒む態度から、ともこの関わりを受け入れ、それ以来母親も保育者も驚くほどの心の変容を表わしていったのである。ともこからの関わりを機に、りこが母親から少し距離を持って友達と一緒に遊べるようになる、第2のステップを踏み出すことになった。



「お母さん、本よんで」寄り集まって見る子どもたち

10:10現在

母親を求めて泣いていただいすけが落ち着いて保育室でままごとを始める  
とけいこも一緒にままごと用のテーブルに向かい合っている。

園庭の「メリーゴーランド」と言っている遊具で、数人の男児たち（進級  
児と新入児が一緒）が「スーパーマン」になって遊んでいる。T「なかよし  
になったねえ」と声をかけると、こうたが「かずおくんすごいよ、だってね、  
カメがもてるもん」と認める。

そこへ、ともこがきて、「あたしもきたよー！あたしものる。りこちゃん  
と一緒に」と言う。りこは、なおことともこと一緒に母親が見守る視線の中  
で安定して、鉄棒やすべりだいを試み、楽しむ。

5/1

りこは登園してカバンを自分で掛け、母親に「おはようノート」にシールを貼る場所を確かめてから（まだTに直接聞くことは出来ない）シールを貼ると、ともこを捜しに自分から園庭に出て、椅子ぶらんこに乗っている。やがて、ともことなおこ、すなおが集まり、後にけんたとかずおが加わって、泥でケーキを作り、「おたんじょうパーティー」の遊びをする。

#### 5/1ーりこの母親からの手紙

「りこのおうちに先生が来られるの本当？」と何度も念を押し、「先生にもドレミちゃんの洋服とピコットポロン（魔法の棒）を見せてあげる。」と言って家庭訪問を楽しみにしておりました。ドレミちゃんの洋服を見ていただき、二階でもいろいろお話していただきました。そして先生にライラックの花を見ていただいたことも、花好きのりこはとてもうれしかったようです。（中略）最後に、「明日はひとりで・・・」というお約束をしました。先生がお帰りになった後「のっ先生大好き」と何度も言うておりました。

5/2

りこが家から「6つのいろ」の絵本をもって来る。4/30の家庭訪問の際に、りこに「たんぼぼ組の皆と一緒に見ようね」と約束していた本である。この朝、りこはなかなか母親から離れようとしないので、Tは積木で囲いを作り、「りこちゃんが面白い本を持ってきてくれたからおうちで読んであげよう。一緒に見たい人はいらっしゃい。」と誘うと、数人の子どもたちが寄り集まってきて一緒に見る。（9:15）「へびが黒い色を呑み込んで病気になったとき、6つのいろは、かわいそうなへびをみて、かなしみのあめをふらせました」と読むと、かずおが「おみまいにきてくれたの？」と言う。T「そう、6つのいろの雨がなぐさめてくれたのよ」と言うと、子どもたちの表情がほっとしたように和らぐ。読み終えて、「じゃあ元気になったひとは遊んでいらっしゃい」と言うと、ともこが「元気になったから遊んでくる！」と言い、りこに「りこちゃん、早くお外と一緒に遊ぼう」と声をかける。りこは、ともこの声に励まされて母親から離れ、ともこと手をつないで後ろを振り返ることなく、園庭へかけていった。

その姿を母親とTは思わず顔を見合わせて見送った後、母親が「先生、いたほうがいいでしょうか？」と尋ねられる。Tは「今日は大丈夫だと思います。お母さんは皆さんとの集まり（保護者の集い）に行ってください。」と答えてりこたちの様子を少し離れた所から観る。りこは、ともこ、なおこ、けんた、ゆりこたちと一緒にままごとを始めていたが、やがてTの方に来て「お母さんは？」と尋ねる。T「お母さんはご用があって出かけるけど、ご

用が終わったらすぐ来るって」と答えると、りこは「ふーん」と言い、再び友だちとの遊びの場に帰っていく。

5/2

#### りこの母親からの手紙

お約束の好きな本を持ってでかけました。ひとりであることを、先生とお約束したとはいっても、無理かもしれない、難しいのでは？と半信半疑おりました。でもりこは私と離れて、先生やお友だちとずっと一緒にいました。お母さんの集まりにりこと一緒に出かけるものと思っていましたのに、あの子が一人で幼稚園で過ごせるなんて、嬉しさと感動で胸がいっぱいになりました。本当にありがとうございました。

りこ、ともこ、なおこ、ゆりこ、けんたたちが初めて一緒に遊び、作ったごちそうを、テラスの「冷蔵庫」(棚)に入れておき、降園時、りこ、ともこ、ゆりこ、けんたたちの母親と一緒に食べてもらう。

5/6

ともこがけんたに「おんぶちゃん、早くあそぼう！」と誘い、5/2に遊んだ園庭の木の家(同じ場所)でともこ、りこ、けんた、なおこの4人で遊びの続きをする。りこの母親は少し離れてその様子を観ているが、りこは母親の存在を意識していないかのように、4人の友だちとのつながりの中で安定して遊ぶ。

#### 5/8 - R子の母親からの手紙

2連休の後で今日はすぐに私と離れられるかと心配していましたが、K男くんと遊びはじめると、私の方を見もしないのですぐに失礼しました。いつもお電話がかかってくるかと待っていましたが、お迎えの時間となりほっとしました。教室に入ると、りこはともこちゃん、なおこちゃんと、ゆりこちゃんとも仲良くしていました。今日のはじめてのお弁当の日でもあるし、どうなるのかと思っていましたが、お弁当も全部食べていましたし、Y子ちゃんという新しいお友だちまで出来たようで、嬉しい驚きでした。私には具体的に何も言いませんでしたが、帰ってからもはずんで、とても楽しそうでした。これが泣いて泣いて私から離れることが出来なかったあの子かと思うと、本当に夢のように思われます。

5/8

けいこは母親と一緒にいる。けいこの母親が「まりこちゃんおはよう」と声をかける。まりこはまだ自分から友だちと関わっていくことがない。Tが

誘いかけるか、けいこの母親の側でけいこと一緒にいることが多いので、Tは「まりちゃん、けいちゃんと一緒にお散歩いってくる?」と促すと、けいこ、まりこ子の母親と一緒に園庭に出る。りこは、母親と離れて、けんたとすべりだいをして遊んでいる。りこの母親は、安定している様子を見て自分で判断して9:40分頃に帰る。けいこの母親も、けいこがTと一緒にいることで納得すると引き上げられる。

5/10

けんた、ともこ、なおこたちは、りこが登園するのを待っている。りこが来るとけんたは「みんなそろったぞー!」と言い、ゆりこは「おにごっこするからおいでー」なおこ「だからくつ、くつー」りこ「はだしになってもいい?」(初めてはだしになる)と勢いよくりここと手をつないで園庭に走っていく。

#### 保育者の読み取りと環境の構成－7期・ステップ2

5/2にりこが初めて母親から離れて特定の友だちと一緒に遊んでから、5月14日までの間に、りこはそれまで遊べなかった時間を取り戻すかのように嬉々として友だちと一緒にする遊びを楽しみ、遊び方も次第に動きが大きくなっていった。5/10には、くつを履くことへのこだわりをなくして、初めてはだしになって遊んでいる姿からも、自分に自信を持ち始めてきていることが伺えた。そうした姿から、りこの母親はりこから少しずつ離れて、遊びを観ながら、他の子どもの良さを話されるようになった。Tも一緒に観ながら、子どもたちがそれぞれに互いを必要とし、関わりの中で経験していることなどを楽しく話した。

この時期、りこの母親は、りこが自分の存在を忘れて遊びに夢中になっている時を捉えて、「先生もういいでしょうか?」とTの了解を得て帰られるようになり、りこの方も気かけない様子で遊びを続けていた。一方けいこの方も、登園時には母親から離れないでいるが、母親もけいこの気持ちの状態を心得ていて、しっかりと抱きしめたり、「一番に来るからね」と約束することで、けいこの気持ちにふんざりをつけるタイミングを掴み、帰る時を自分で判断されるようになっていた。この時期りこもけいこも母親から離れて遊びに向かっていくまでの時間、遊びに夢中になって母親の存在を気しなくなるまでの時間がだんだん短くなっていった。Tはりこことけいこの動きを気かけながらも、まだ不安定でいる子ども(だいすけ、すなお、まりこ)への心的な援助や、活発な子どもたちへのさまざまな要求に応じて動いていたために、りこの内面の微妙な動きには気づかないでいた。しかし、5/15

以降、りことけいこは、申し合わせたかのように再び母親と離れることを強く嫌がるようになった。

りこ、けいこ、まりこは母親から離れない。りこは、最近の明るい表情も見られないので、Tは「積木のお家作って遊ぼうか」と誘いかける。りこ、まりこ、けいこ、なおこ、他数人の子どもたちも入ってくるが、すぐに分散していく。9:45分けいこは納得して母親からはなれるが、りこは一日母親と一緒に過ごす。5/18以降、りこは再び登園時に母親から離れたがらなかったり、遊びに取りかかるまでの時間が長くなったりしたが、ともこ、なおこゆりこたちとの気持ちのつながりはますます強くなっていく。

けいこは登園時母親と離れたがらないが、20分～30分一緒に過ごす、母親との約束で納得して離れ、保育者を投げ所にしなげらいろいろな友だちと関わって一緒に遊べるようになる。

### 保育者の読み取りと環境の構成—ステップ3

「5月の半ばよりどうしてなのか、その原因はわからないのですが、また私と離れることが出来なくなり—」と8/6受けの母親の手紙に記されているように、ステップ3と区切った5/18～5/30の期間は、りこもけいこも登園時に再び母親と離れることを嫌がり、離れて遊びに向かうまでの時間が不規則に乱れた。その原因として、次のことが考えられた。

5/2に初めてともことの関わりを持ったりりこは、以降、母親が見守る中でともこ、なおみ、けんたたちとの関わりの中で嬉々として遊び、母親もりこを見る心にゆとりが出てきていた。と同時に、りこが自分(母親)の存在を忘れて遊びに夢中になっている(と母親には捉えられた)時、母親の方から離れていくことを試みていかれた。保育者としても、このような母親の気持ちの動きは「前向きである」と受けとめられたし、母親が帰ってしまった後も、特に変わった様子もなく遊んでいると思って、まだ不安定でいる子どもたちや、活発に遊んでいる子どもたちのさまざまな要求に応じて動いていた。つまり、登園時の「母親と一緒に過ごす時間」以降、母親と保育者の視線が以前ほどにはりこに向けられていないということ、りこは敏感に感じていたのだろう。

また、けいこの方も、母親が帰るタイミングをうまく掴んでいるように見えていたが、逆にけいこの方が母親の焦りを見抜いていたのかも知れないと思う。

こうした、母親と保育者の早過ぎる判断や気持ちの動きを反省し、保育者

は再びりこ、けいこ、まりこたちの気持ちの状態に細かく目を向けるとともに出来るかぎり寄り添っていくようにした。

ステップ  
4

6/1

りこは母親と登園後、すぐにテラスでともこ、なおこ、けんた一緒に水遊びを始め、9:15に母親が帰る。その後は裸になって水たまりの中に入って遊んだり、全身を泥んこだらけにして遊ぶ。

けいこも昇降玄関で母親と離れる。しばらく泣くが、Tに抱かれながら、「お弁当の時にきてもらう」という約束で納得して別れる。

けいこはTに「おそとのアスレチックにいこうよ」と言い、Tが見守る中で、アスレチックの垂直に設置されている階段登りに挑戦する。

「せんせい！木のアスレチックの長い（高い）ところから登ったり下りたりできたよ。何回も挑戦できましたって書いて（お手紙に）ここからさっさって登れた」と言う。このときTと一緒に見ていたまりこも自発的にたいこ橋のアーチ型のうんていに挑む。

T「けいこちゃんもまりこちゃんもこのごろ勇気を出して挑戦するようになったね！」と励ます。このことをけいこまりこの母親に子どもに読める文字と文章で知らせる。

6/13

りこは、ともこ、なおこと一緒に赤土でのごちそう作りの遊びに取りかかり、（昨日の続き）熱中しているので、母親は9:15分に帰る。9:20分、りこが初めてTに「せんせい、一緒にりこちゃんたちと遊んで」と呼びにくる。Tが赤土のごちそうを見にいくと、いくつものケーキを作って並べていて、「ここはレストランです」という。レストランでいくつものケーキを食べた後、Tが他の場に行こうとすると、りこがついてきて、一緒にバッタを採りにいく。この日は、15人の男児と女児たちが一緒に附中の校庭の草原でバッタ採りに夢中になって、楽しさを共有する。

8期

6/15

登園時の円テーブルでの会話が、保育者と子どもとのやりとりだけではなく、子ども同士で交わす会話や遊びへの誘いかけが活発になり、子ども達の動きに個々のめあてが表わされるようになった。

T「今日は何をしようかな？けいこちゃん」

けいこ「あそこのうんていで遊びたい」と言い、あきこに「一緒にうんていで遊びたい」と言う。あきこは「いいよ！」と応え、二人はすぐにうんていに駆けていく。

一方、かずおが登園時に泣いて母親から離れず、「帰りたい」と繰り返す



ので、母親にしばらく一緒にいてもらう。母親がかずおに絵本を読んであげていると、りこ、ともこ、なおこ、さちこ、あきこ、けいこ、だいすけたちも寄り集まってきて、一緒に絵本を見た後、「バツタ採りにいこう」となおこが言い出す。さちこ「まってまって、私たちもバツタ探したかったんだ」といい、一緒に行く。かずおは、この日一緒に遊んだりこ、ともこ、なおこ、さちこ達と親しくなり、お弁当を一緒に食べたことから、翌日は一人で保育室に入ってくる。



6/17

りこが玄関でいつまでも母親と離れないで、母親が困っていることを、年長組の担任から知らされ、迎えに行くと、りこは保育者を見て泣きながら「じゃあ離れるね、お母さんと。早く迎えにきてー」と言い、母親に抱きついていた手を決心したかのように離す。保育者はその手を握り、抱きしめると、初めて保育者に身体をあずけて泣くが、2～3分で泣きやむ。カバンを自分でロッカーに掛けると遊戯室に保育者と一緒に行き、積木の囲いの「おうち」の中でともこ、なおこ、けんた、ゆりこと一緒に粘土をして遊ぶ。が、保育者がそばを離れるとすぐに不安になり、ついてくるので、この日はりこのそばを離れないようにする。

#### 保育者の読み取りと環境の構成－8期・ステップ4

6/1、けいこを昇降玄関で母親から抱き取り、しばらくしてけいこの要求に応じて園庭のアスレチックに行った時、けいこは保育者が見守る中でアスレチックの垂直に設置されている丸木の階段登りに挑戦した。そして、「木のアスレチックの長い（高い）ところから登ったり下りたりできたよ。何回も出来ましたって書いて」と言う。けいこのこの言葉は、保育中保育者が子どものことばや動きを記録している姿を見ていて、自分の挑戦を記録に書いて欲しいという気持ちと同時に、母親が見ていないところでの自分の姿を知らせて欲しいという母親への思い、そして自分に対する自信を表わしている

と思う。

一方りこは、ともこ、なおこ、けんたちとの心のつながりをお確かめしながら、保育者との気持ちのつながりを求め始めていることが、次の言動から感じられた。

6/13、りこは、ともこ、なおこと一緒に赤土でのごちそう作りの遊びに取りかかり、熱中しているので、母親は9:15分に帰る。9:20分、りこが初めて保育者に「せんせい、一緒にりこちゃんたちと遊んで」と呼びにくる。保育者が赤土のごちそうを見に行くと、いくつものケーキを作って並べて、「ここはレストランです」と言う。レストランでいくつかのケーキを食べた後、保育者がバツタ採りの場に行こうとすると、りこがついてきて、一緒にバツタを採りに行く。

このような、保育者への気持ちの歩み寄りが見られた後、りこは初めて母親から離れ、保育者を信頼する姿を見せた。それは、次のような姿を通して確かめることが出来る。6/17、りこが昇降玄関で母親と離れないでいることを、年長組の先生から知らされ、迎えに行くと、りこは保育者を見て泣きながら「じゃあ離れるね、お母さんと。早く迎えにきてー」と言い、抱きついていた手を決心したかのように離す。保育者がその手を握り、抱きしめると、初めて保育者に身体をあずけて泣く。

こうした姿（保育者に抱かれる）は、りこが入園後初めて見せた、他の大人を信頼する姿であり、また他者との関係の中で自立しようとする心の、成長の節目を表わす姿であると受けとめた。一方、母親はステップ3の時期にりこが少し不安定になったことを、「私はため息の出る思いでした」と8/6の手紙に記しているが、保育者から見ると、母親の態度は入園当初（ステップ1）に比べて表情も柔らかく、ゆとりを持って「待つ」姿勢が見られた。そして、りこの世話よりもむしろ一緒に遊んでいる子どもたちに心を配り、どろんこで汚れた子どもの身体を洗ったり、着替えを手伝ったり、一緒に園庭のおもちゃの片づけをしたりするなど、自然に保育に参加していく姿が見られた。保育者としても、こうした母親の動きに感謝の気持ちを表わしながら、母親の自発的な参加を積極的に受け止めていくようにした。

りこの保育者に対する信頼感の芽生えは、このような保育者と母親の信頼関係の成立と無関係ではないように思う。

6/20

りこは、昇降玄関でスナリと保育者に抱かれて母親と離れる。りこ「なおこちゃんともこちゃんはどこにいった?」と言い、園庭に捜していく。後で保育者も行ってみると、りこはなつみ、ゆうこ達と一緒にうんて

母親「すぐすぐ迎えにくるよ。お友達と一緒に遊んでたら」

ゆきこ「さびしいよ。(ゆうこが母親と一緒にいると)泣いてたら赤ちゃんになっちゃうよ。」

9:32分保育者が抱き取る。ゆうこは激しく抵抗して泣いていたが、保育者が「一緒にお家作ろうか」と言い、周りの子どもたちに「積木を運んできてごらん」と促すと、一緒にいた子どもたちは積木を運んで作り始める。ゆうこは泣きやんで、その様子を見ている。りこは、ゆうこに手を差し伸べて、一緒に積木を運ぶ。おうちが完成すると、「さくらちゃんごっこ」を始める。

#### 保育者の読み取りと環境の構成－8期・ステップ5－

ステップ4の期間では、りこの自発的な保育者への気持ちの歩み寄りと信頼感の芽生えが感じられた。ステップ5として記した、6/18～7/18の期間では、りこと母親との関係およびりこと保育者との関係が質的に変化してきた。それは、6/18に、「りこは昇降玄関で保育者に抱かれてスナリと母親から離れる」そして、6/22「りこは、昇降玄関で(保育者が迎えに出ると)お母さんもう行って」と促す。と記しているように、りこの気持ちが母親への固着を弱めつつ保育者に依存していくことで、自分の存在を他者の中で位置づけていく最初のステップであると受けとめた。6/29には、母親と昇降玄関で離れて、ゆうこを手をつないで入室してきた後、保育者に初めて自分で聞きながらシールを貼り、一つ一つの動作を確かめ、遊びに取り組んでいった。このような保育者への信頼感は、りこの遊びに自信や挑戦意欲をうながしていき、同時にまりこ、さちこ、ゆうこたち新しい友だちへの働きかけと、7/18の記録に見られるようなゆうこへの励ましや思いやりの気持ちへとつながっている。

この時期保育者は、まりこ、ゆうこへの対応に心を注ぎながらも、りこや学級の子どもたちが表わす主体性、意欲、自信、友だちへの思いやりなどを「○○ちゃんは○○名人だね」と認めたり励ましたり、学級の子どもたち同士で認め合ったりさせながら、子ども同士の心のつながりと学級での一人ひとりの存在感を確かにしていかなせるように努めた。

#### 8/6の母親からの手紙

(前文略) 終業式の日には、先生からメダルをいただきました。(＊1人ひとりに一学期頑張ったことを書いて渡す)「お母さんと離れることは、お友だちと一緒に楽しく遊べることだってわかったね。うんてい、てつぼう、泥んこ、水遊び、プール、いろんなことに挑戦して強い心と身体になったね」

とほめていただきました。先ず本人もたどたどしい読みぶりですが、全部読みました。両親もそれぞれ読んで良かったね、頑張ったねと言って喜び合いました。このメダルは、りこの一生の成長の基になる大事な宝物だと思います。

## Ⅱ 考 察

「子どもと母親と他の子どもたちの関係の中で保育者が構成していった環境」がもたらしたもの

入園当初、母親から離れる不安におびえて、激しく泣き、保育者の歩み寄りを拒み、ひたすらに母親と一緒にいることだけを望んだりこ。一方、母親もどうしてよいのかわからず、とまどいや不安や悲しみさえも表わして、保育者に「どうしたらいいでしょうか」と問いかけてきた。「入園当初の親子の受け入れ方を見直す」ということから、2頁に記した4つの事項を実践するにあたって保育者が取り組むべき最初の課題は、「保育者が抱こうとしてもおびえ、保育者とのつながりを拒む子どもとの信頼関係をどう築いていけばよいのか」ということであった。担任（筆者）は、「りことの信頼関係は、直接に抱いたり話しかけたりすることによっては築けないだろう」ということを直感的に理解した。そして、入園当初ステップ1（4/14～4/24）の時期に、次の保育方針を自分の中で確認した。

- ①保育者として子どもにアプローチしていく前に、まず母親の気持ちをほぐし、保育者と保護者が親しく子どもの様子を語り合える関係を築いていくことが先決であること。
- ②保育者の方から母親と子どもが離れることを促したり、急がせたりしないで、ゆったりとした雰囲気での子どもの歩みの一步一步をみつめ、母親と子育ての悩みや喜びを共有していくこと。以上の保育方針は、りこだけではなく、入園当初に母子分離が困難であった数人の子どもと母親たちにも同様に当てはめられた。

つまり、りことの信頼関係を保育者とりことの対一の関係から築いていこうとするのではなく、りこと母親、そして、りこをとりまく友だちとの関係の中で築いていこうと考え、時期時期の環境の構成を試みていった。以下、このような視点から3者の経験（りこ・母親・他の子どもたち）を対比し、また保育者と母親・母親とりこの心的な関係の変化についても考察したい。

### 1、母親が幼稚園で一緒に過ごすということの意味

#### (1)子ども（りこ）と他の子どもをつなぐ「場」としての母親の存在

「これまで母親と離れることが殆どなかったものですから、朝私と離れようとしないうちを見て、心配していたことがやっぱり起こってしまったと思いました。」と、4月16日の母親からの手紙に記されているように、入園前、家族以外の大人との親しい関

わりや近所の同年齢・異年齢の子どもたちと一緒に遊ぶ経験を殆ど持たなかったりこにとって、幼稚園という環境は広大な海の中に独りであるような不安を感じさせるものであったのだろう。そして母親の方もこうした大きな不安がりこに襲っているであろうことをすでに読み取っていることが「もしこの状態でりこ一人で過ごす、どんなに心細くて不安で緊張したかと思うと、「お母さんも一緒に・・・」と先生におっしゃっていただいたことはとてもありがたいことでした。」という文面から伺える。

こうした園生活の出発に於て、母親の方の不安感もりこと同じ程度に大きいことが、母親の緊張した表情や態度、時折目にはじむ涙から伺い知ることができた。一方、入園当初（4/14～4/24）は、りこだけではなく、けいこ、すなお、まりこ、ゆきお、だいすけ他、担任との直接的なふれあいや、甘えや、何かを要求するなどのコミュニケーションが持てない子どもたちも多くいた。また、一見遊んでいるように見えていても、急に不安で泣き出す子どももいる。このような子どもたちは、まず母親を拠り所として新しい環境を観察し、さまざまに展開する出来事を徐々に受けとめ、安定しようとする。入園後2日～5日間くらいすると、しだいに一緒にいる母親の人数が減り、子どもたちは否応なく一人で過ごすことになったが、不安感はずぐには解消しないので、保育者やりかの母親、けいこの母親を拠り所として集まり、積木の「おうち」の中で一緒に絵本を見たり、粘土遊びをしたりして過ごし、母親がいる一つの間を共有することで安定するようになった。4/15保育者が、りこの母親に「こんどはりこちゃんのお母さんに読んでもらいましょう」と声をかけたのは、りこの母親に「りこと母親と他の子どもたちが共有できる居場所をつくってほしい」と願ったからである。りこが、初めてともこのコミュニケーションを持ったのは、4月21日の「むしたんけん」の遊びを見ていた時のことであるが、それ以前の経験として、母親が読む絵本と一緒に友だちのいる中で見たり、「おうち」の中に入ってみたりする中で、りこが徐々に友だちのいる環境に慣れていったこと。そして、いつも母親と一緒にいるりこの存在に関心を寄せていった、ともこや他の友だちが、母親の存在を媒介にした「一緒感」あるいは不安感を包み込んでいる「場」の中での「共有感」を味わっていたからではないだろうか。

このような意味で、6期・ステップ1の環境の構成として「りこの直接的な関わり方を避けて、周りの子どもたちと自然に共有していけるような遊びの間を、母親と共に、子どもの動きに応じながらつくっていった」ことは、りこと周りの友だちがふれあい、一緒に遊べるようになるための素地として有効であったと思われる。

## (2)保育の間を通してのコミュニケーションによる、母親と保育者の信頼関係の成立

入園時の強い不安感、りこだけではなく、母親も同様であった。そのことは、8/6の母親からの手紙に次のように記されていることからわかる。

「それでも入園当初は何人か同じ様なお友だちもいて、そのお母さん方もいらっしゃっ

たのでよかったのですが、だんだん降園の時間までいるのは私一人という状況になり、しかもいつまで続くかわからないあいかわらずの様子に、私自身子どものために良くないとわかっているにもかかわらず落ち込んでしまいました。でも先生が「こちらは全くかまいませんから、お母さんは今ほりこちゃんと一緒にいてください」とやさしくおっしゃって下さって、本当にありがたかったです。」

はじめての子どもを幼稚園に預ける母親にとって、「いつまで続くかわからない」先の見通しが持てない状況の中で、「こちらでも自分の子なのにさっぱりわからなくなり、先のことを思うと真暗な気持ちになりました」と絶望感に近い気持ちを表わされている。

そんな状況の中で、担任が我が子をどう見ているのか（子どもの見方）また、我が子の出方にどう対応してくれるのか（保育者の対応）ということは、母親にとっては最大の関心事であろう。

ステップ1の時期には、担任が「いまは子どもと一緒にいることが大切である」ということを伝えたことで、ある程度は安心してりこに付き添っていられたと思う。

4月21日、一緒に他の子どもの遊びを見ている母親に、担任は「大丈夫。りこちゃんは何もしていないようでも、こうしてお母さんと一緒に遊びを見ていることが経験なんです。この時間は決して無駄にはならないし、この時間は、りこちゃんが自分で一歩を踏み出すために必要な時間なんだから、そう思って焦らないでいきましょうね」と話した。そして母親と一緒に見守る中で、次のできごとを通して、りこは初めてともこという友だちと気持ちのつながりを持っていった。

「あるお友だちが八手の葉っぱをとって遊んでいました。それを見たりこは家にある本の「だるまちゃんが持っていた葉っぱだ」とすごく欲しそうにしていました。でも自分で取ってくる勇氣はないようで、じっと見ていました。するとともちゃんが「りこちゃんはい」といって葉っぱをとってりこにくれました。その時、私は本当に涙が出るくらいうれしかったです。(中略)ともちゃんのおかげでりこも私も本当に救われた気がしました。子どもにとってお友だちというのは本当に大切なものだ改めて感動しました。」と、母親はこの日のできごとを記している。

この日以来、担任と一緒に子どもたちの遊ぶ様子を見守る中で、担任の見方やそれを表わす言葉が、事実として母親に実感出来るようになっていったと思う。

保育の場で、一緒に子どもの様子を見るということ、それは、母親が実感をもって子どもを理解することにつながってくる。そして、それはやがて、他の子どもとの関係も含めて理解していくということにつながっていった。そうした理解が、ステップ3の時期に、母親の自発的な自然な形での保育のサポート（片づけ、着替えの世話など）をうながしていったのだと思う。母親が、担任の見方や対応のしかたやことばを信頼できるようになり、あらためて担任に任せようという、安心感が持てたころから、母親の態度に楽しさやゆとりが見られるようになり、次項で述べるような、母親としての主体的な

判断や行動が見られるようになった。

## 2、各ステップに見られる母親の心的態度と子どもの心的態度・行動の変容

### ステップ1（4/14～4/21）

母親自身も非常に強い不安感と絶望感に近い感情も抱きながら、りこに付き添っている。カバンや他の持ち物の始末や「おはようノートのシールを貼ることも、全て母親がやっつけてしまっている。りこの方も母親に隠れるようにして周りの様子を伺っていて、担任のことばかけや、スキンシップなどのコミュニケーションを受け入れない。

### ステップ2（4/24～5/16）

ともことりこのつながりができ、りこは母親が見守る中でともこ、なおこ、けんたちと一緒に遊べるようになり、母親の不安も少しづつ和らいでくる。また、4月30日の家庭訪問で、りこの初めてのプライベートな話やスキンシップもでき、りこの方も担任に対する警戒心を和らげてくる。5月2日、りこは家庭訪問の際に担任と約束した絵本「6つのいろ」を持ってきて、担任がその本をともこ、なおこ他数人の友だちのいる場の中で読んでやり、絵本を通してことばのやりとりを楽しませたことをきっかけにして、りこは、ともこの声に励まされて、初めて母親から離れて園庭へ遊びに出ていく。

5月8日以降、母親は、りこが遊びに夢中になり、安定している様子を見計らって、「せんせい、もういいでしょうか？」と担任の了解を得て家に帰られるようになる。

りこの方も母親の安心感に対応するように、嬉々として友だちと一緒にする遊びを楽しみ、遊び方もしだいに大胆になり、動きが大きくなっていく。

### ステップ3（5/15～5/31）

5月15日以降、りこは再び母親と離れることを嫌がり、遊びに取りかかるまでの時間が長くなったり、不規則になっていく。

母親は、一時期落胆してはいたが、「なかよしの友だちがいてくれたことは、ずいぶん心丈夫でした。そして先生にも、「りこちゃんの場合は、焦って早く離れるよりも、自分から離れられる時期をゆっくり待った方がが無理なく離れられると思いますよ」とおっしゃっていただき、私も安心して一緒にいることができました」と手紙に記し、さらに、「私のそういう気持ちが伝わるのか、自分から「最初はお母さんも一緒にいて。あとはりこちゃん一人でいいから」と言えるようになりました。」と、自分の気持ちの在り様が、りこの気持ちにも影響していることを示唆される。

母親の態度は、入園当初に比べると、表情も和らかく、ゆとりをもって「待つ」姿勢がみられた。また、自ら子どもの着替えや片づけなどを一緒に手伝われるようになる。

一方保育者は、自分の早すぎる安心を反省し、再びりこ（他けいこ、まりこ）の気持

ちの状態に細かく目を向けるとともに、出来るかぎり寄り添っていくようにする。

#### ステップ4（6/1～6/19）

りこは「なかよし」の特定の友だちと一緒に熱中して遊べるようになり、母親が見守る時間も次第に短くなっていく。同時にりこの方から「先生きて」と保育者を求めてくるようになる。6月17日、登園時にりこは保育者を見て、母親にしがみついていた手を決心したかのように離す。担任がその手を握り、抱きしめると、初めて担任に身体をあずけて泣くが、2～3分で泣き止む。

このような、保育者への気持ちの歩み寄りが見られた後、りこは初めて母親から離れ保育者を信頼する姿を見せた。この期間は、りこが母親の思い、保育者の思いを受けとめながら、自分の気持ちを自立に向けて整えている時期、言い換えれば、母親から保育者へのリレーのバトンタッチをする時に必要な助走期間であったとも言える。

#### ステップ5（6/20～7/19）「離れるってたのしいね」

6月20日、保育者が片づけを促していると、りこが園庭から帰ってきて、「もうおかたづけ？早いなあ今日は。」と言って足を洗いながら、「離れるってたのしいね」という。

ステップ5として記した、6/18～7/18の期間では、りこと母親との関係および、りこと保育者との関係が質的に変化してきた。それは、6/18に、「りこは昇降玄関でTに抱かれてスナリと母親から離れる」6/22「りこはTが迎えに出ると、「お母さんもう行って」と促す。と記しているように、りこの気持ちが母親への執着を弱めつつ、保育者との関係を通して、他者の中で自分の存在を位置づけようとしていく最初のステップであると受けとめられる。

ステップ4までの期間では、りこはともこ、なおこを心の拠り所にしていたが、ステップ5では、りこがまだ不安定なまりこ、ゆうこたちに心に向けて、思いやりの気持ちを表わすようになってきた。

つまり、母親の気持ちに保育者への信頼感とゆとりが出来た頃から、りこは母親との心の関係を固着的な依存から自立的な依存へと変えていき、保育者との関係を拒否から受容と信頼へと変化させていったのである。

りこ「離れるってたのしいね」T「だれと？」りこ「おかあさんと」ということばのやりとりは、りこが生まれて初めて味わった自由感と自立感を表わすことばである。この実感は、母親から離れて遊べるようになるまでの、葛藤を乗り越えて獲得していった経験（友だちとの心のつながりを基盤にして取り組んでいった遊びの楽しさ・保育者との関わりと信頼）に基づいているように思う。

以上の各ステップを通して、りこの保育者に対する信頼感の芽生えは、保育者と母親との信頼関係の成立と無関係ではないと言える。りこは、両者の信頼関係を基盤として、友だち



とのつながりを持ち、母親との関係に適度な距離をおいて自立感を培っていったのだと考える。

### Ⅲ 今後の課題

#### 「子育て支援と保育者の役割」を考える

幼稚園における「子育て支援」が提唱されて以来、さまざまな試みがなされている。その最も大きな課題は、「エンゼルプラン」と連動しての保育時間の延長、つまり「預かり保育」の導入と、「相談機能」としての試みであろう。とくに後者については、本研究を通してその重要性は明らかになったように思える。何故なら、はじめに述べたように、母親の抱えている子育てへの不安や悩みが、想像する以上に大きく、深いものであること。またそれを受けとめ、共に話したり考えたりできる母親同士のつながりやネットワーク機能が非常に希薄になっているという、育児における環境の現実を見るからである。母親は、もっと見近な相談相手を求めているにもかかわらず、自分からは心を開いて他者に相談できないというジレンマを抱えているのではないだろうか。

この度の実践は、保育の課題を子どもの立場からだけではなく、親（特に母親）との関係の中で捉え、考えようと試みた。

またこの実践は、先にふれた論文「登園をめぐるトラブルに関する臨床的研究」の中で、肥後氏が提出している課題「限られた保育態勢の中でさまざまな心理的な問題に対応するための最善の方法はどのようにすることなのか、といったことが実証的に検討されなければならない。`少々泣いても我慢させるべきだ`といった乱暴な保育原則論ではなく、実際に子どもの内面で何がどのように経験されているのかを多くの事例を重ねて検討する必要がある」（「登園をめぐるトラブルに関する臨床的研究」16頁）ということをあらためて受けとめ、4歳児の事例の一つとして検討してみた。だが、子どもの内面の経験についての捉えと分析考察が不十分であり、考察が時期時期の環境の構成と母親の心理的な経験に偏ってしまったように思う。次の実践の課題として残したい。

もう一つは、保護者に対する「子育て相談機能」を充実する為の幼稚園の役割と保育者の関わり方を具体的に考えてみる必要があると思う。

「連携とは親からの問い掛けや依頼や要求に対応していくことではなく、その問い掛けなり依頼なり要求を生み出している「親なりの解釈」と「保育者の解釈」とを、どのように共有していくかと言う問題であることがわかる。いわゆる「エンゼルプラン」においては、保育所や幼稚園における育児支援機能の一環として相談機能を重視しているが、保育者が親に対して果たすべき相談機能とは何かという問題を考える際に、この解釈の共有という視点は

重要な前提となるものと思われる。」(「登園をめぐるトラブルに関する臨床的研究」6頁)  
こうした意味で「相談機能」を捉えるならば、従来の「個人懇談」あるいは「カウンセリング」のような、話し合いの場だけではなく、保育の実際の場面の中で、子どもの姿を共に見、語り合い、理解や解釈を共有していったこの度の試みは、「相談機能」の一つの方法として意味を持つものではないかと思う。今後の実践を重ねて確かめていきたい。

#### 引用・参考文献

根ヶ山光一・鈴木晶夫編著(1995)「子別れの心理学」福村出版

肥後功一・野津道代(1997)「登園をめぐるトラブルに関する臨床的研究」島根大学教育実践研究第7号